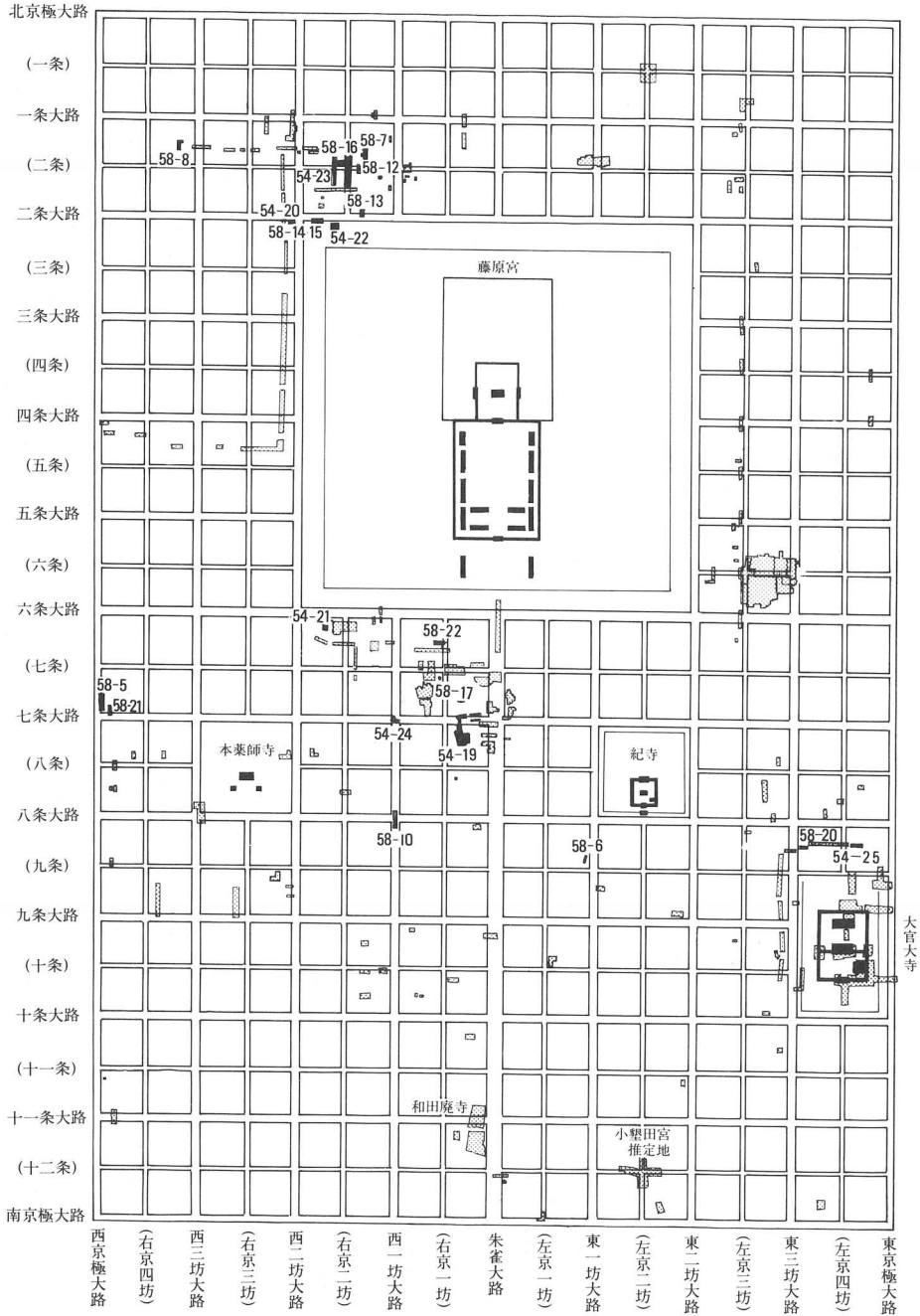


## II 藤原京の調査



第11図 藤原京内調査位置図 (1 : 20000, 網目は既調査地 条坊は模式図)

# 1. 左京九条四坊の調査（第54—25次）

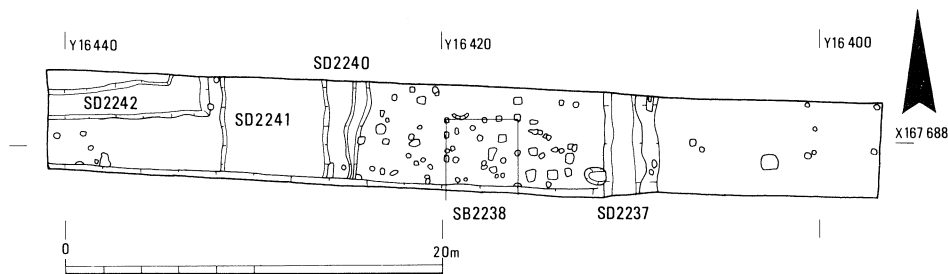
（1988年3月～4月）

この調査は、農道新設工事に伴う事前調査として橿原市南浦町で実施したものである。農道は幅6mで総延長590mにわたって新設される計画であり、今回は初年度分として、東西44m・南北5.5mの範囲の調査を行った。調査地は、国指定史跡大官大寺寺域北限の北方約100mの水田で、香久山の南麓の末端部に位置する。藤原京の条坊呼称では左京九条四坊東北坪にあたり、当地区の土地利用状況の把握を目的に調査を行った。

層序は、耕土、灰褐色土、黄灰色土、整地土、暗灰色粘土（地山）となる。整地土は地表下0.7m前後にあり、黄色ないし橙色をした山土を多く含む粘質土からなり、西に厚く、東に薄い。厚さは0.6～0.7mである。この整地土は同層から出土した7世紀前半代の土器や後述する遺構の状況を考慮すると7世紀中頃までには終了したと考えられる。遺構の検出は整地土の上面で行った。

**遺構** 検出した遺構には小溝のほか、南流する素掘溝3条、西流する素掘溝1条、建物1棟と約70個の小柱穴や浅い土坑状の凹みがある。

溝SD2240は調査区中央寄りにあり、炭化物を多く含む暗褐色粘質土が堆積する。堆積土からは7世紀中頃の土器が出土しているので、整地後すぐにこの溝が掘削されたとみられる。他の3条の素掘溝は藤原京期に属し、上層はいずれも焼土や炭化物を含んだ暗灰色粘質土を用いて埋め戻されている。溝SD2237は幅4m・深さ0.3mで、下層に灰色粘土、中層に砂混灰褐色粘質土が堆積する。溝SD2241は幅6m・深さ0.2mで、下層に灰色粘土が堆積する。両



第12図 第54—25次調査遺構配置図（1：400）

溝はほぼ方位に沿って南流しており、溝肩間の距離は14.6mとなる。溝SD2242は南流していたものが調査区内でほぼ西折している。幅は1.5m～2m、深さは0.3mで、下層に淡褐色砂質土が堆積する。これらの溝からは7世紀後半から藤原宮期にかけての土器が出土した。

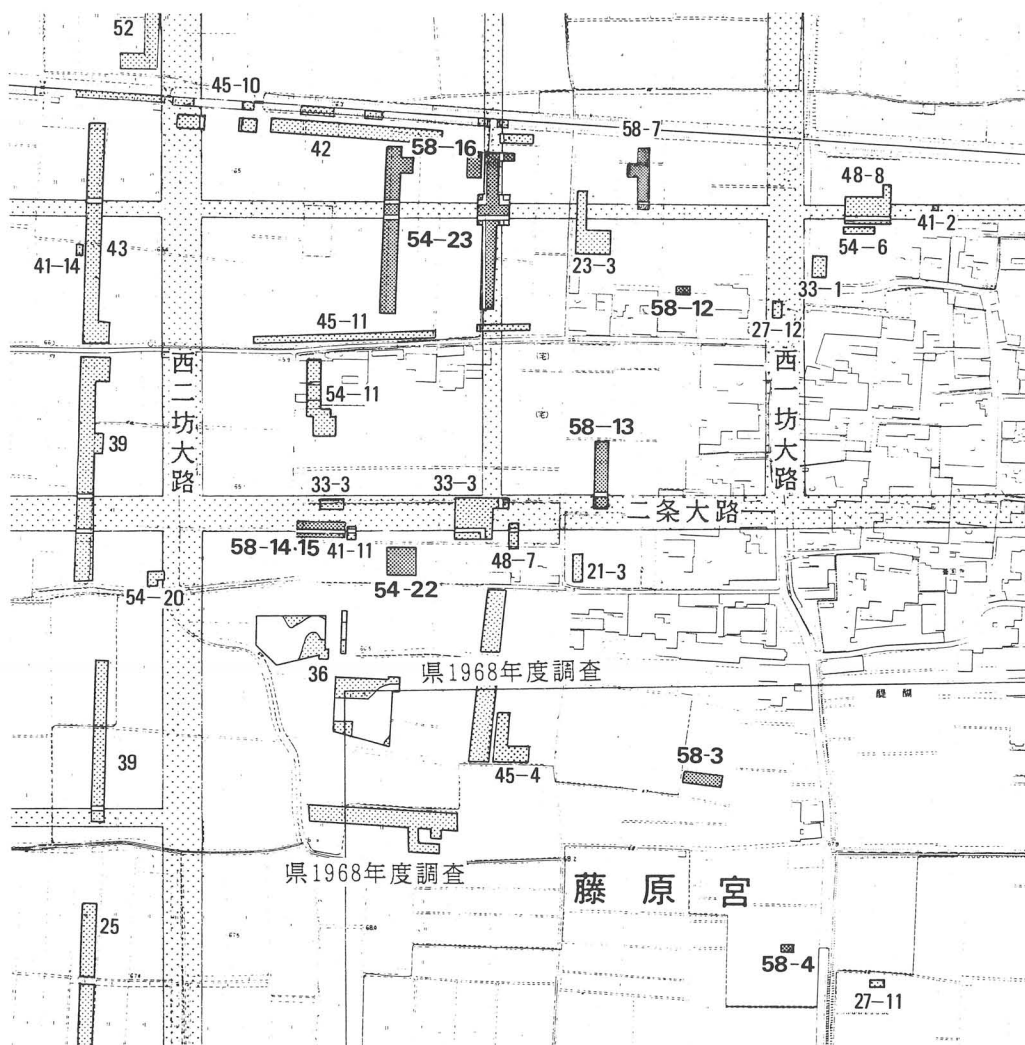
柱穴は主に溝SD2237とSD2241とのあいだで検出したが、建物としてまとまるのはSB2238のみである。桁行2間(3.8m)・梁行2間(3.6m)以上の南北棟である。柱穴からの出土遺物が皆無のため年代を確定し難いが、柱掘形の形状や周囲に平安時代前期の土器を出土する柱穴があることなどを考慮すると、平安時代に位置付けることもできる。その他の柱穴は一辺0.5m前後のものと同程度のものに大別できる。出土土器からみて前者は7世紀代、後者は平安時代以降と考えられる。なお柱穴は深いものでも僅か0.3m前後であり、この地区が後世に相当削平されたことを示している。

**遺物** 出土遺物には7世紀中頃から8世紀初めにかけての土師器、須恵器のほか土馬、円面硯、ルツボ、フイゴ羽口、銅滓、大官大寺所用瓦片、さらに円筒埴輪や金環などもある。

**まとめ** 今回の調査によって、当地区の古代における土地利用形態について新たに二つの知見を得た。一つは7世紀中頃には完成していたとみられる大規模な整地土の存在である。同様の整地は、調査地の西方約300mでもすでに確認されており、藤原宮成立前の飛鳥諸宮の造営との関連で理解されている(耳成線第2次調査、概報12)。今回の確認によって、その整地は東西400m、南北330mの範囲に及んでいることが判明した。さらに藤原京期の遺構は素掘溝のみである。このうち、南北溝SD2241、SD2237は東四坊坊間路心から東へ各々約52m、約72mの位置にあたる。その位置や規模からみて、単に宅地を分割するだけの溝とは考え難く、おそらく香久山南麓一帯の基幹排水路の機能を有していたものと推定される。今回の調査は道路敷という限定された調査であったため、整地に伴う施設や藤原京期の建物等は未検出である。今後の周辺の調査が期待される。

## 2. 右京二条一・二・三坊の調査（第58—7次等）

この地域は藤原宮の北側にあつて、外周帯をはさんで藤原宮に接するという、きわめて重要な場所にあつている。この地域一帯は、開発の速度が特に速いこともあつて、調査件数が多い。このため、藤原宮・京関係の資料、なかでも条坊遺構に関する資料が特に沢山蓄積されている。本年度においてもこれらに関する重要な知見の追加があいついだので、ここにこの地域の調査をまとめて報告することにする。



第13図 右京二条一～三坊周辺図

## a 第58—7次調査

(1988年7月)

この調査は駐車場造成に伴う事前調査として橿原市醍醐町で実施した。調査地は右京二条二坊にあって、南半に二条条間路北側溝が予想されていた。調査区の層序は上から順に耕土、床土、灰褐色土、暗褐色砂質土であり、地表下0.6mで茶褐色粘質土の地山面となる。遺構の検出はこの地山面で行った。

検出した遺構には、藤原京期の東西溝とそれ以降の井戸、斜行溝などがある。

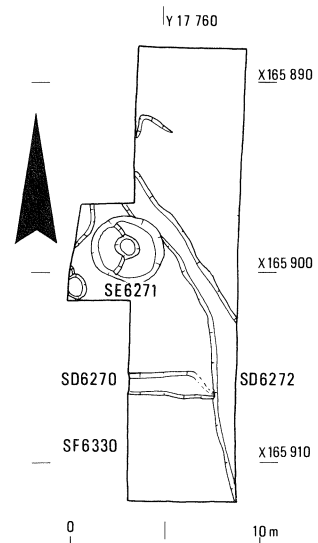
東西溝SD6270は幅1.1m・深さ0.15mで、暗灰色粗砂が堆積している。遺構の遺存状態はきわめ

て悪く、特に東半は痕跡が残る程度であった。この溝からは、藤原宮期の土器が少量出土している。次節で報告する二条条間路と西二坊坊間路の交差点位置を確認した第54—23次調査の成果と出土遺物からこの溝を二条条間路の北側溝と考えることができる。

斜行溝SD6272は幅1.6m、深さ0.3mで流水による灰色砂が厚く堆積する。調査区内を南北に蛇行して流れており、自然流路と考えられる。ここからは瓦器の小片が出土している。

井戸SE6271は径3.8mのほぼ円形で、深さは1.8mである。壁はほぼ垂直に掘られ、中心部が一段深い。井戸枠は残っていない。下層には黒褐色の粘土が堆積し、上層は褐色粘土・黄色粘土で人為的な埋土に埋め込まれている。埋土からは12世紀後半から13世紀にかけての瓦器が出土している。斜行溝SD6272より新しい。

今回の調査で、二条条間路北側溝を確認することができた。また調査区の位置は東北坪の東西中心線にはほぼあたっていたが、坪内の区画施設や建物等の藤原京に関連する遺構を確認することはできなかった。



第14図 第58—7次調査  
遺構配置図(1:400)

## b 第54—23次調査

(1988年2月～4月)

この調査は、私道建設に伴う事前調査として檀原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条二坊の中央部分にあたり、条間・坊間両路の交差点を含む条坊関連遺構の存在が予想された。このため、調査は道路予定地全域を対象とし、東区（東西6m・南北68m）と西区（東西6.6m・南北73m）の2本の調査区を設けて行い、遺構の状況により一部を拡張した。調査区の層序は上から耕土、床土、暗褐色土の順であり、藤原京期を含む大半の遺構は、この暗褐色土上面で検出した。この層序は、東西両調査区とも基本的に同様である。調査の結果、西二坊坊間路とその東西両側溝、二条条間路とその南北両側溝、および両路の交差点、井戸3基などを検出した。

**東区の調査** 西二坊坊間路SF1082は、調査区の輪郭線にほぼ重複して検出した。坊間路の溝心心距離は約6.5mである。その東側溝SD6334・6335は幅1.2m・深さ0.2m、西側溝SD6336・6337は最大幅2m・深さ0.2mである。このうち西側溝は、二条条間路との交差点以南では、痕跡的にしか確認できない。二条条間路SF6330は、調査区の中央部やや北寄りで見出した。条間路は坊間路と同じく溝心心距離で約6.5mある。その南側溝SD6331は幅1.3m・深さ0.15m、北側溝SD6332・6333は幅1.2m・深さ0.3mである。

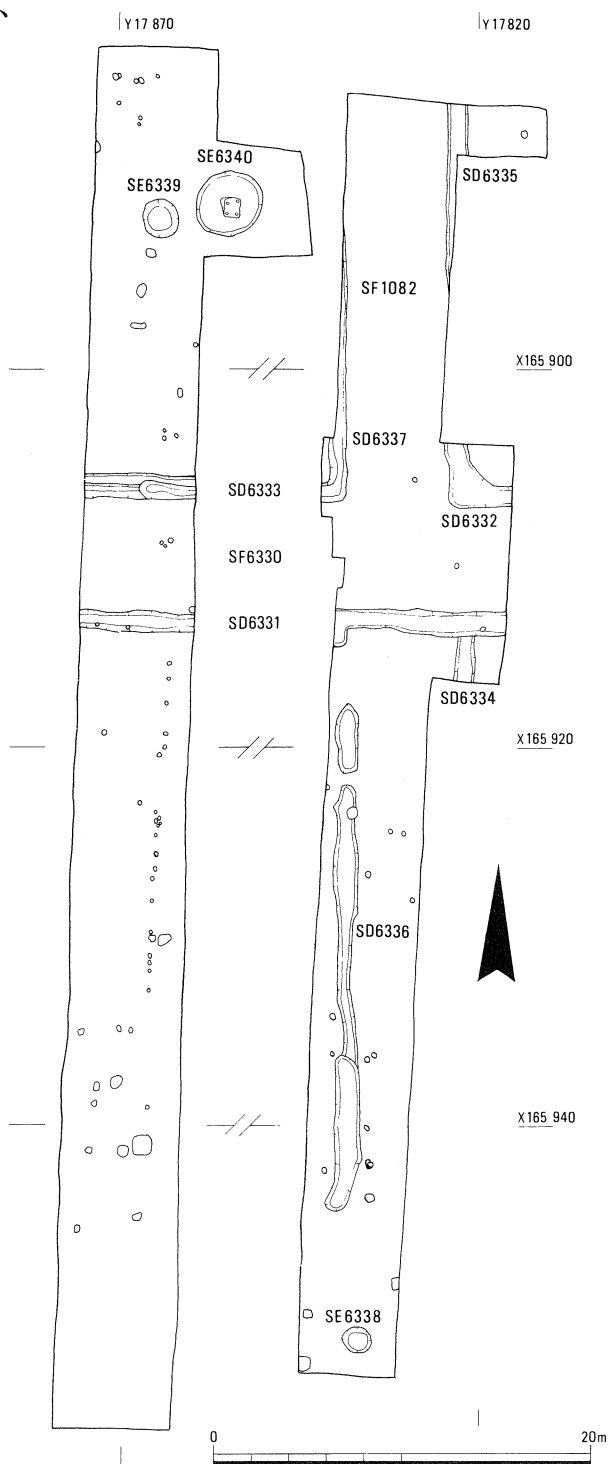
西二坊坊間路と二条条間路が交わる交差点の状況は、交差点北側では坊間路の東西両側溝SD6335・6337と条間路北側溝SD6332・6333がそれぞれL字形ないし逆L字形に接続している。これに対し、交差点以南の坊間路東西両側溝SD6334・6336は、削平をうけてやや不明確な点も残るが、条間路南側溝SD6331にそれぞれがT字形に接続していたようだ。北西に下がる地形から考えると、条間路以南の水は条間路南側溝に集めて西に流し、条間路北側溝の水は坊間路東側溝を経て北へ、また交差点の水は条間路北側溝と坊間路西側溝に分け、それぞれ西と北へ流したものであろう。

調査区南端で円形の掘形をもつ井戸SE6338を見出した。直径1.1m・深さ0.8mの浅いもので、井戸枠などはみられない。これは11世紀代に属す。

西区の調査 調査区中央北寄りで、東区で確認した二条条間路SF6330とその南北両側溝の西延長部分を検出した。南側溝SD6331は幅1m・深さ0.25m、北側溝SD6333は幅1.3m・深さ0.2mである。

この他、条間路の北方で井戸2基を検出した。東側で確認した井戸SE6340は、直径3.5mの円形の掘形を持ち、中央部に横板組の方形の井戸枠があった。枠組は四隅に角柱を立てて横板を固定するもので、内寸法は一辺0.9m・深さ3.5mの規模である。横板15段分を残し、井戸底部には玉石が敷かれていた。井戸枠の内部には暗灰色粘土層が堆積しており、その下部などで藤原宮期の完形土器が多数出土した。その内訳は、須恵器の杯B2点・平瓶7点・倭形瓶1点・甕1点、土師器の杯A2点・杯C1点・甕7点である。この内、甕には墨や篋で記号を記したものがあ

る。西側の井戸SE6339は径1.9m・深さ1.7mの円形の掘形を持ち、中央部に井戸枠を抜き取った



第15図 第54-23次調査遺構配置図(1:400)

痕跡をとどめる。出土遺物からみて11世紀代の遺構であろう。

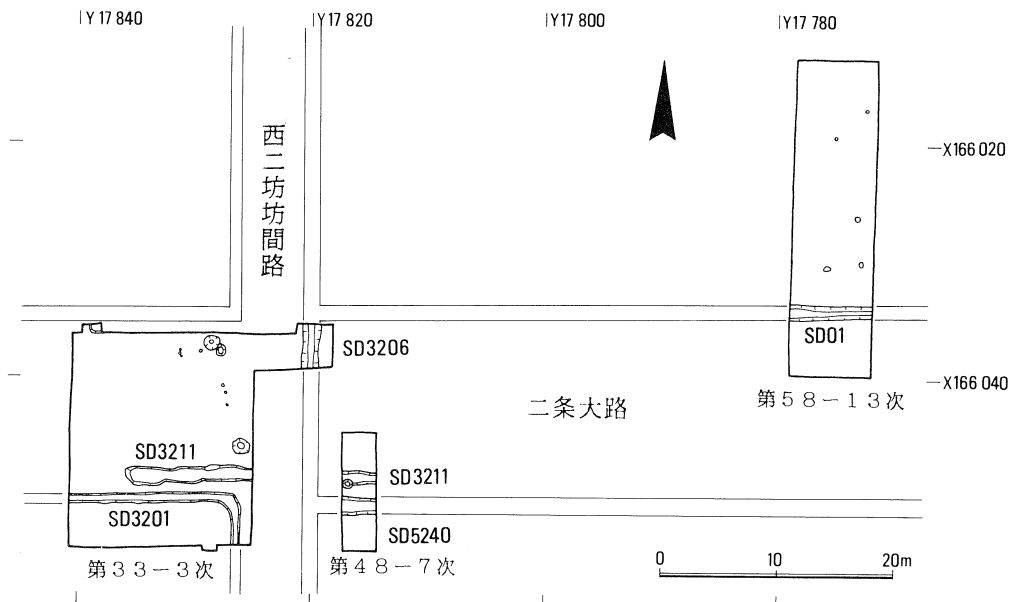
まとめ 本調査では、当初の予想どおり、西二坊坊間路と二条条間路の交差点を検出し、藤原京の条坊を復原する上に、一つの新たな手がかりを得ることができた。ただし、宅地内の状況を復原する上に重要な遺構、とくに建物や塀などの遺構は確認できなかった。そんななかで、今回検出した井戸SE6340は右京二条二坊西北坪の東南隅付近に位置しており、15段以上にも積み上げた井戸枠の規模からしても、宅地内で重要な役割を担っていたものと思われる。おそらく周囲には、井戸に伴う建物などが建っていた可能性は高く、今後の調査の進展に期待したい。

### c 第58—13次調査

(1988年11月～12月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条二坊東南坪の西南部で、南端部は二条大路の想定位置である。

調査は東西7m・南北27.4mの調査区を設けて行った。調査区の層序は上から耕土、床土、灰色砂質土ないし褐灰色粘質土があり、その下が藤原京期の遺



第16図 第58—13次調査遺構配置図 (1 : 600)



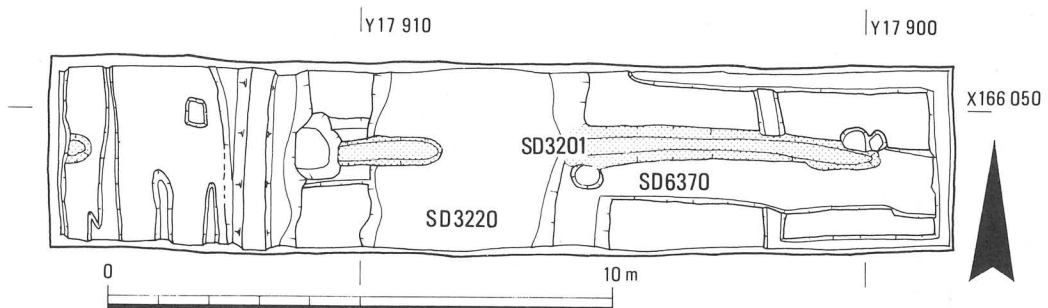
構検出面となる。検出面は南が高く北に低い。北半では灰褐色砂質土ないし暗灰色粘質土の地山が露呈し、南半には東南から西北へ向かう古い河川がある。検出した遺構は東西溝1条と小穴数個である。東西溝SD01は、二条大路北側溝にあたる。幅1.3~1.4m・深さ0.45mの素掘溝で、底に灰緑色粘土が堆積し、淡褐色粘土で埋められている。溝中から藤原宮期の土器・軒平瓦が出土した。二条大路南側溝は当調査区の南西約40mの第33—3次・48—7次調査区（概報12・17）で検出しており、二条大路の幅員は15.0m、両側溝心心距離は16.4mと復原できる。これは第39次調査での成果（幅員15.2m、側溝心心距離16.2m、概報15）とほぼ一致する。坪内については、坪の外周を区画する塀などの施設や建物は検出できなかった。

d 第58—14・15次調査

(1988年12月)

この調査は橿原市醍醐町における共同住宅および農業用倉庫の新築に伴う事前調査として実施したものである。当該地は藤原宮に北面する二条大路にあたる。また藤原宮西面外濠は第36次調査で北隅から西へ振れることを確認しているが、北延長位置で現在の水田面が大きな段差を生じており、これが旧地形を反映したものか否かが注目された。このため二条大路の南側溝想定位置に東西2枚の水田をまたいで東西18m・南北4mの調査区を設定した。

東区の層序は上から耕土、床土、暗灰褐色粘質土、灰褐色砂質土、明灰色粘質土となる。検出した主な遺構は東西溝2条と南北大溝1条である。東西溝S



第17図 第58—14・15次調査遺構配置図（1：150）

D3201・6370は明灰色粘質土上面で検出したものでほぼ同位置で重複している。東西溝SD3201は最大幅0.9m・深さ0.15mで、東区の両端での溝底は西で0.2m低い。この溝を第33—3次調査東区で検出した二条大路南側溝の西延長部と理解すると、西で南に約10分振れている。東西溝SD6370は幅0.13m・深さ0.05mほどが残り、溝底はほぼ平坦である。西端では急な落ち込みがあり西側との地形の段差が生じた時点で機能していたものと思われる。南北大溝SD3220は幅4m・深さ0.6mほどで、1層上の灰褐色砂質土面で掘り込んでいる。第33—3次調査西区で検出した遺構と一連と考えられる。存続年代は明らかでないが埋土を覆う暗灰褐色粘質土には瓦器を含む。

西区では床土下の暗茶褐色土上面で、中世以降の浅い南北溝と小穴のほか、西端で東区で検出した南側溝SD3201の延長部を確認できた。溝底は東区西端よりさらに0.2m下がっている。遺構面は東区より0.4m低いが削平された形跡が強く、本来は西側になだらかに傾斜していたものと考えられた。

#### e 第58—8次調査

(1988年8月)

この調査は住宅建設に伴う事前調査として檀原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条三坊の東北坪にあたり、第41—16次調査（概報15）の成果からすると一条大路の存在も予想された。このため東西3m・南北11mの調査区を設けて調査したが、藤原京期の明確な遺構は検出できなかった。

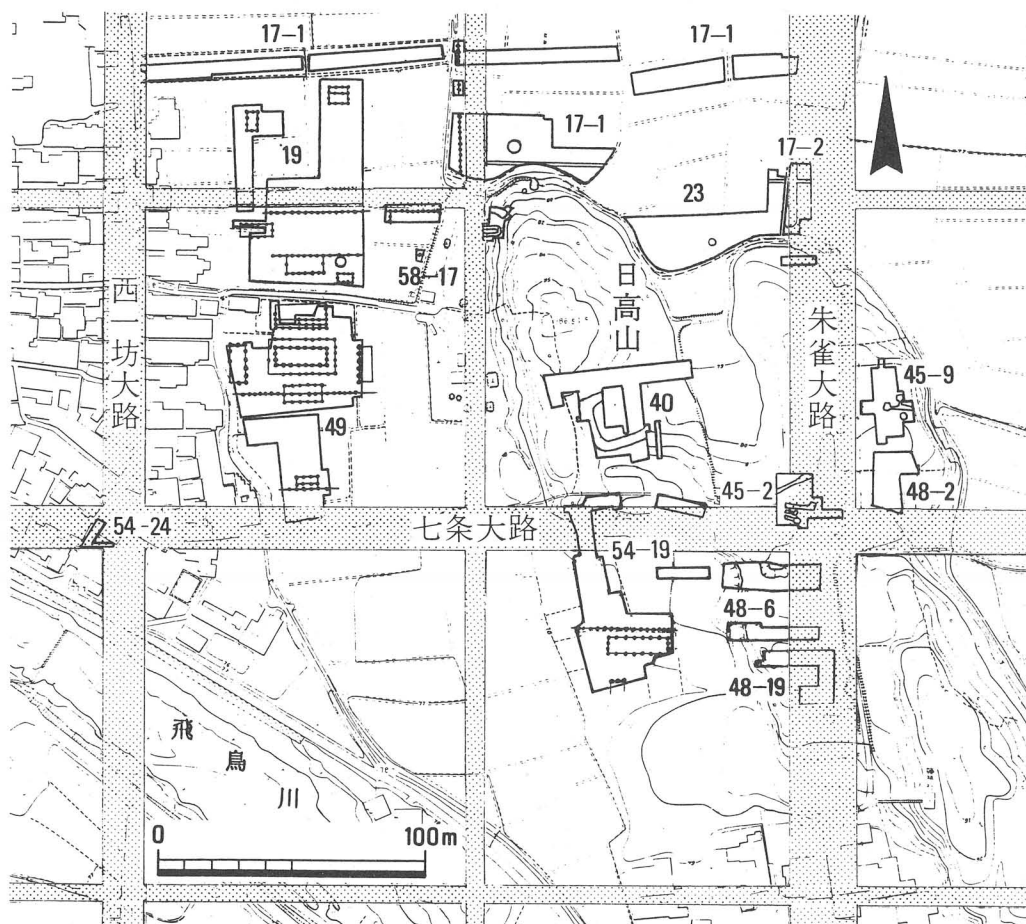
#### f 第58—12次調査

(1988年11月)

この調査は住宅改築に伴う事前調査として檀原市醍醐町で行ったものである。調査地は右京二条二坊東南坪にあたる。東西5m・南北3mの調査区を設けて調査した。藤原京期の遺構は検出されなかったが、中世の環濠の一部である可能性の高い沼状の落ち込みと、東南隅で柱穴1を検出した。

### 3. 右京七・八条一坊の調査（第54—19次等）

藤原宮の朱雀門の南には南東から北西方向にむけて日高山が横たわっており、この西側には飛鳥川が日高山にほぼ平行して流れている。日高山と飛鳥川にはさまれた右京七条一坊西南坪では、第19次調査と第49次調査（藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告）が実施されており、一町規模で整然と配置した邸宅の遺構がみついている。今回の2件の調査地のうち1件は、七条大路と西一坊坊間路をはさんだ南東側に位置しており、調査面積が大きいので、同規模の建物群の検出が大いに期待された。もう1件の調査地は七条大路にあたっていたので、その手がかりを得るのを目的とした。



第18図 右京七・八条一坊周辺図

a 第54—19次調査

(1987年12月～1988年3月)

この調査は道路建設・グラウンド造成の事前調査として、檀原市上飛驒町で行ったものである。調査地は、日高山のほぼ中央の面斜面から、その山裾を西に降りた平坦地までおよんでいる。藤原京の条坊でいえば、七条大路をはさんで北側でわずかに右京七条一坊東南坪にはりだしており、大部分は南側の同八条一坊東北坪に属す。

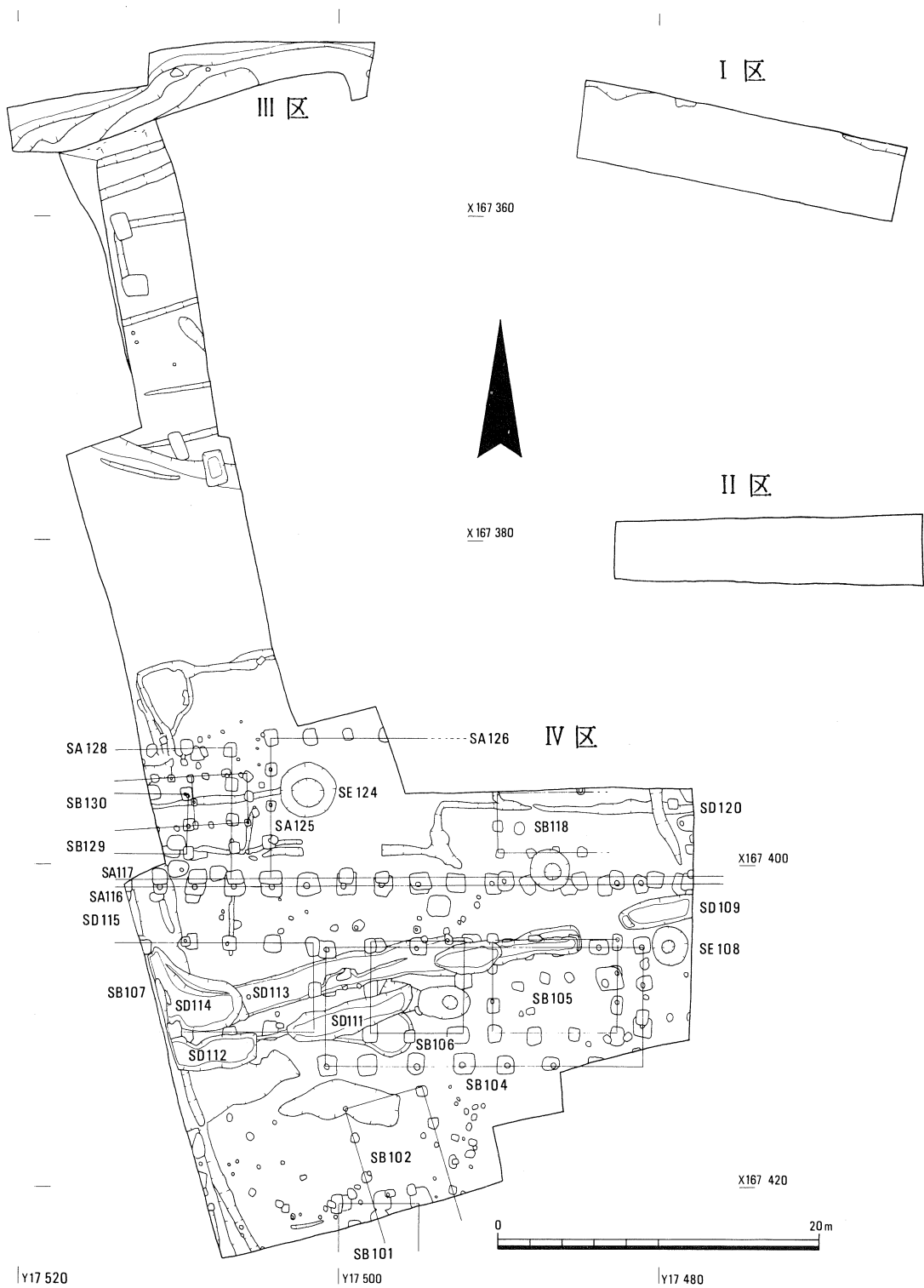
調査は4箇所に分けて行った。

I区 調査地の北東部に設けた東西約20m・南北約5mの調査区である。表土を取り除くとすぐ花崗岩質の地山になった。ここは日高山の西斜面にあっており、地山面の高低差は東端と西端で約0.7mある。遺構は現代のものに限られており、北側への落ちが3箇所あった。

II区 I区の南約20mに設定した東西約20m・南北約4mの調査区である。地表面から、東端で約1.7m、西端で約3.2m掘り下げたが、土層は赤褐色砂質土の現代置土に限られていた。第48—6次調査(概報17)が本調査区の東に約4m隔てた位置で行われている。その成果と組み合わせれば、日高山の西斜面はきわめて急角度に落ちていることを示している。

III区 調査地の東北端でI区の西側約15m隔てて設けた東西約24m・南北約4mと、東西に長い調査区である。表土の直下は花崗岩質の地山である。日高山の西斜面にあっており、西端から西10m足らずで平坦地に達する。東端と西端との高低差は約2.1mである。また北にもゆるやかな落ちがある。現在調査区の南側は崖面を呈しており、高低差は約2.8mある。この調査区でも藤原京に関連した遺構はみつからなかった。

IV区 III区の南に接して設けた調査区で、2度南側に拡張したこともあって、調査区の外形は不整形となった。東西約36m・南北約70mの範囲におよぶ。層序は北端、中央、南端で異なる。北端では、赤褐色砂質土を取り除くと、すぐ花崗岩質の地山となる。中央付近では、上から、赤褐色砂質土、暗緑色砂質土、茶色土、茶灰色砂質土、赤褐色土、暗褐色土、それから花崗岩質の地山となる。



第19図 第54-19次調査遺構配置図 (1 : 400)

このうち赤褐色土は藤原京期の整地層、暗褐色土は7世紀前半の土器を含む包含層である。南端では、上から、赤褐色砂質土、淡茶褐色土、茶褐色土、礫混褐色土、黄褐色土、赤褐色土、礫混褐色砂となる。このうち、礫混褐色砂が地山である。遺構検出面は、北半部で花崗岩質の地山面、南半部で赤褐色土の上面かこれを取り除いた面で行った。この調査区で南半部に限って、藤原京期や中世などの時期の遺構がみつかった。

### 遺構

検出した遺構には、掘立柱建物、掘立柱塀、素掘溝、石組井戸などがあり、これらは主に7世紀、藤原京期、中世に属す。

**7世紀の遺構** 溝S D 120がこれにあたる。IV区の中央を屈折しながら、ほぼ西に流れる小溝で、幅約0.6m・深さ0.05～0.1mである。

**藤原京期の遺構** この時期の遺構は柱穴の重複関係などから、A・Bの2時期に分けることができる。なお、どちらの時期の遺構も、国土方眼方位で北に対してほんのわずかに西に振れている。

(A期) 掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条がある。

S B 104は、南半中央にある大規模な掘立柱東西棟建物である。桁行7間(19.6m)・梁行3間(7.2m)。柱間寸法は桁行2.8m、梁行は2.4mである。柱掘形は、やや不揃いだが、一辺0.9～1.3mで方形を呈する。断ち割り調査を行った柱穴では、南側柱穴に限って、底に拳大の礫を厚さ0.1～0.3mほど敷き詰めているものがみついている。また南側柱列東第2柱穴では、山土混褐色土と茶色粗砂を厚さ0.05mずつ交互に入れて版築状につき固めた状況が確かめられた。柱掘形の深さは現状で0.3～1.0mほどである。柱は、抜き取られた形跡はなく、それとわかるものはすべて柱痕跡があった。また北東隅柱穴や南側柱列東第6柱穴では柱根がわずかに残っていた。

S B 101は、調査区南端にかかった、南北棟とみられる掘立柱建物である。調査区内には、北側柱2間分(4.8m)のみを検出した。柱間寸法は2.4mである。柱掘形は、一辺1.1～1.3mで、方形を呈する。深さは0.5または0.6mであった。

S A 116は、南半にあって、東西に延びる掘立柱塀である。東方・西方とも調査区外に延びる。調査区内で15間分（34.8m）を確認した。柱間寸法は多少ばらつくが、2.32m前後である。柱掘形は一辺1.1～1.4mで、方形を呈し、深さは現状で0.6～0.9mほどである。なお柱を抜き取った形跡はない。

（B期） 掘立柱建物5棟、掘立柱塀5条がある。

S B 105は、南半東端にある掘立柱の東西棟建物である。この建物の北側柱筋はA期の建物S B 104のその北約0.6mにある。さらに北側柱筋と南側柱筋は、この西に並ぶ建物S B 106・107に一致する。桁行3間（7.8m）・梁行3間（5.85m）。柱間寸法は、桁行2.6m・梁行1.95mである。柱掘形は、一辺が、0.7～1.0mで、方形を呈する。

S B 106は、南半中央にある掘立柱の方形とみられる建物である。桁行と梁行がともに2間（5.4m）で、柱間寸法は2.7mである。柱掘形は、一辺が0.7～1.2mで、方形を呈する。東妻柱穴の断ち割り調査を行ったが、それによれば、この柱穴は、現状の深さが約0.8mで、山土混褐色土や淡茶色砂質土などを厚さ0.05～0.1m程度ずつ入れて版築状につき固めていた。

S B 107は、南半西半にある掘立柱の東西棟建物である。桁行は4間以上（10.52m）、梁行は2間（5.4m）である。柱間寸法は桁行2.63m・梁行2.7mである。柱掘形は一辺が0.9～1.1mの方形を呈する。

S B 118は、中央東半にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間以上（5.2m）・梁行2間（3.8m）。柱間寸法は桁行1.73m・梁行1.9mである。柱掘形は、一辺約0.5mと小さく、方形を呈する。

S B 129は、中央の西半にある東西棟の掘立柱建物である。北側柱1間以上（2.2m）、東側柱2間（3.8m）のみを検出した。梁行の柱間寸法は1.9mである。柱掘形は、S B 110よりやや大きく0.7mで、方形を呈する。

S A 117は、塀S A 116の位置を基本的に踏襲した掘立柱の東西塀である。調査区内では、桁行15間分（35.3m）検出した。柱間寸法は不揃いで2.4m前後である。柱掘形は、一辺約0.7mで、方形を呈する。深さは現状で0.7m。

S A 125は、塀S A 117で調査区内の西第5柱穴から北に伸びる掘立柱の南

北堀である。桁行4間(8.6m)で東方向に鍵手状に折れ曲がる。柱間寸法は、2.15mである。S A 126は、堀S A 125の北隅の柱穴から始まる。桁行3間(7.3m)のみを、調査区内で検出した。柱間寸法は、2.43mである。堀S A 125とS A 126の柱掘形はともに、一辺0.8m前後で、方形を呈する。なお建物S B 118は、堀S A 117・125・126で囲まれている。

S A 127も、調査区内の堀S A 117の西第4柱穴から北に伸びる掘立柱の南北堀である。桁行4間(7.8m)で西方向に鍵手状に折れ曲がる。柱間寸法は、1.95mである。S A 128は、堀S A 127の北隅の柱穴から始まる。桁行2間(5.0m)のみを、調査区内で検出した。柱間寸法は、2.5mである。堀S A 127・128の柱掘形はともに、一辺0.8m前後で、方形を呈する。なお建物S B 129は、堀S A 117・127・128で囲まれている。

**中世の遺構** 掘立柱建物2棟、井戸2基、素掘溝5条などがある。

S B 102は、南端にある掘立柱の南北棟建物で、国土方眼方位に対して、北で西にかなり振れている。桁行3間以上(6.5m)・梁行2間(5.0m)と思われるが、妻柱穴はみつかっていない。柱掘形は、直径約0.7mである。

S B 130は、中央西端にある掘立柱の東西棟建物で、国土方眼方位に対して、北で西に振れている。桁行5間以上(5.7m)あり、東から3間目の位置に間仕切りがある。梁行は2間(2.9m)。柱間寸法は、桁行2.85m・梁行1.45mである。柱掘形は一辺約0.4mで、ほぼ方形である。

S E 108は、南半東端にある石組井戸である。平面形は、円形で直径約1.8m、深さは現状で約0.9mある。底面には直径0.35m・高さ0.26mの曲物を据えていた。井戸の掘形は、現状で直径約2.2mの円形をなしており、掘形内には人頭大の石を密に放り込んでいた。

S E 124は、中央にある石組井戸である。平面形は、円形で直径約1.0m、深さは現状で約2.4mある。井戸の底部は花崗岩質の脆い岩盤に、直径約1.2m・深さ約0.75mで半球状に掘りくぼめていた。井戸の掘形は、直径約3.4mの円形で、掘形内の裏込めに、山土混青灰色砂質土や褐色土を用いている。

S D 109は、南半東端の素掘溝である。幅約4.4m・深さ約1.1mである。



西に約3m隔てて溝SD113が、この南にあらたに溝SD111が掘られた。幅や深さは溝SD109とあまり変わらない。調査区の西端で溝SD114・112が溝SD113・111に接続して、南北に連なる。これらの溝には青灰色粘土や暗灰色粘土などの粘土が厚く堆積していたので、本来は濠状に水をたたえていたものと思われる。したがって、溝SD109とSD113の間が途切れているのは、ここが陸橋として利用されたためだろう。

中世の遺構には、環濠とみられる施設のほか、建物や井戸がみついている。これらが有機的にどのように関係するかは分からない。

### 遺物

その内容は、土器、陶磁器、瓦などで、年代は弥生時代から中世におよぶが、藤原京の時期のものは少なく、むしろ中世の遺物が豊富である。瓦類としては丸・平瓦のほかに、押捺パルメット紋軒平瓦が1点、四重弧文軒平瓦が1点、熨斗瓦が2点出土した。また井戸SE124から古瀬戸とみられる水注がほぼ完形で出土している。なお弥生時代の遺物に伴う遺構は検出していない。

### まとめ

今回の調査地においては、藤原京に関する遺構はIV区南半に限られており、I・III区とIV区北半では、表土直下で花崗岩質の地山を確認したが、遺構はすべて現代のものであった。これらの調査区では、ここを通過することが想定されている七条大路の路面や側溝はいうにおよばず、坪の外郭を閉じる塀など藤原京の時期に属す遺構は後代の削平でことごとく失われたとみられる。

ここで、当坪の周辺で明らかになっている条坊遺構を手がかりにして、今回検出した藤原京期の建物の配置について検討してみよう。七条大路は検出できなかったので、第29—7次調査（概報11）で検出した六条大路と本薬師寺の西南隅で実施した調査（概報6）で検出した八条大路の位置から、七条大路の位置を割りだそう。八条条間路については第45—6次調査（概報16）の成果を使おう。また朱雀大路については第17—2・3次（概報7）の成果を、西一坊坊間路については第17次調査（概報6）の成果を用いることにする。

藤原京A期に建てられた塀SA116は、坪を南北に四等分する位置にほぼ相

当する。建物S B 104では東西の中軸線は坪の中軸線の西約2.2mにあってややずれているが、南側柱筋は坪を南北に三等分する位置にほぼあたっている。

B期には、堀S A 117を堀S A 116の位置に基本的に踏襲して建てた。この堀の南側すなわち坪の内側に、3棟の建物S B 105・106・107を建てたが、その北側柱筋を建物S B 104の北側柱筋の位置のやや北側においたので、坪を南北に三等分する位置からほんの少しだけずれることになった。

この坪は、北側で推定七条大路心から南に坪の6分の1か5分の1ぐらい、東側で朱雀大路心から西に坪の4分の1か3分の1ぐらい、日高山が当坪のなかにせりだしていたとみなすことができる。たとえば東側の落差は特にきつく、第48—6次調査で検出した日高山の岩盤の傾斜変換点とIV区遺構検出面との高低差は、約5.1mにも達しているのである。

今回の調査によって、このように自然地形上の制約が特に大きい右京八条一坊東北坪に、藤原京期に2時期にわたって大規模な建物群が整然と建設されており、かつ坪のなかに条坊を割り付けの基準として建物や堀が配置されていたことが明らかとなった。七条大路こそ検出することはできなかったものの、この実例は、京内の土地利用の実態について検討する際、貴重な資料となろう。周辺地域でのなお一層の調査の進展が待たれる。

#### b 54—24次調査

(1988年3月)

この調査は、道路建設に伴う事前調査として、橿原市飛驒町で実施したものである。調査地の基本層序は上から表土、焼土、暗褐色土、灰褐色砂礫となる。暗褐色土には近代までの遺物を含み、その上面からは旧幼稚園舎の撤去に伴う大型の焼土土坑が多数掘り込まれている。灰褐色砂礫層は高いところでは現地表下0.4mであるが著しく削平を受けており、藤原京期に遡る遺構は確認できなかった。

この砂礫層は隣接する飛鳥川によって形成されたものと判断される。なお、砂礫層からは遺物は出土していない。

## 4. 西京極大路（下ツ道）の調査（第58—5次）

（1988年6月～7月）

この調査は店舗新築に伴う事前調査として檀原市城殿町で行ったものである。ここには遺存地割などからも岸俊男説の藤原京西京極大路、下ツ道の存在が予想された。藤原京の条坊呼称では右京七条四坊にあたる。

下ツ道の東側溝を検出する目的で、当該地の南端と北端に東西16m・南北6mの2つの調査区を設定して調査したが、両調査区の様相が異なるため、東西6m・南北25mの拡張区を設けて結び、最終的に「I」字形の調査区となった。

調査地の層序は上から耕土、床土、赤褐色砂質土、赤褐色粘質土の順で、遺構は赤褐色粘質土の上面で検出した。

**遺構** 検出した主な遺構は4条の南北溝と溝をせきとめた溜りである。

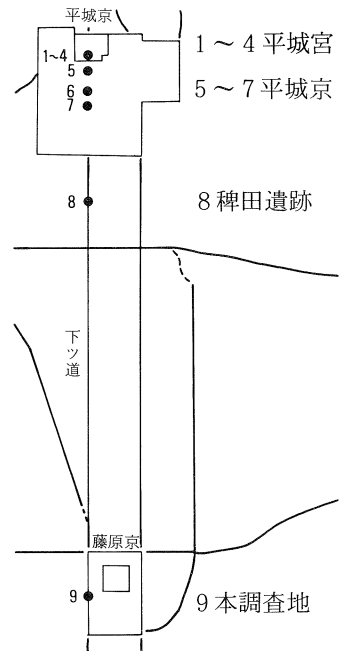
S D181は、下ツ道東側溝の検出面より1層下層で検出した古墳時代の南北溝で、幅0.8m・深さ0.3mである。

南北溝S D182は幅0.8m・深さ0.3mである。埋土は砂が中心で、底面は凹凸が激しい。

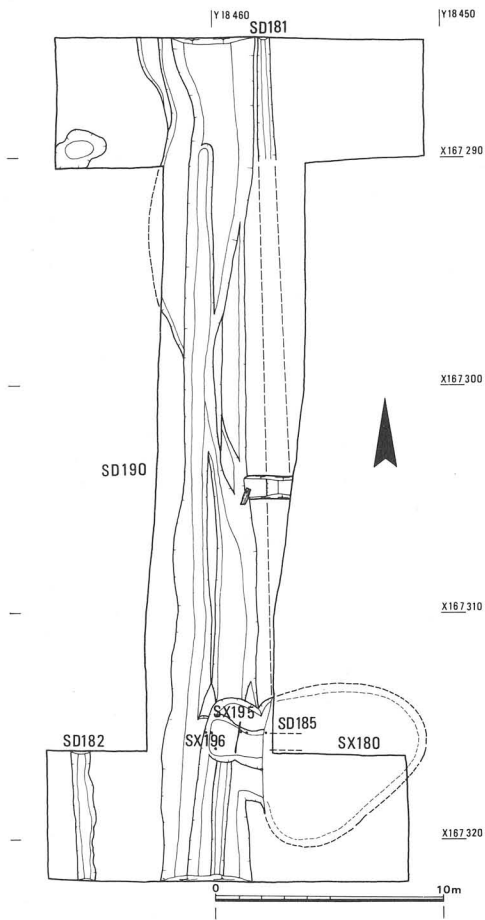
下ツ道東側溝S D190は南に流れる南北溝で、調査区の中央部以北では1条だが、南調査区では心がずれた古（A）・新（B）の2条がある。規模はともに幅1.5～2.5m・深さ0.8～1.2mである。

溜りS X195は調査地南端で下ツ道東側溝（古）S D190Aに伴って検出したものである。おそらくしがらみS X196を組んで水を貯めたのであろう。S D190Aの底面は、S X195の部分で約0.6m北側に比べて低い。

池状施設S X180はS D190Aの東にあって、溝と連なっていた。平面形は東西8m・南北7mの不整形円形を呈するものと推定できる。S X180は埋ま



第20図 下ツ道関係調査位置図



第21図 第58-5次調査遺構配置図(1:300)

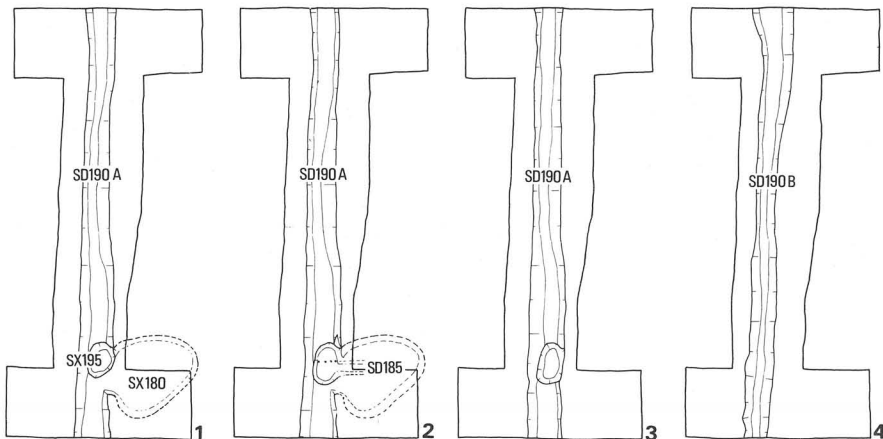
って東西溝SD185で東側溝SD190Aとつながることもあった。

**遺物** 土器、木簡、木器、瓦、銭貨が出土した。その大半は下ッ道東側溝SD190からのものである。

土器は土師器、須恵器が出土した。SD190Aから7世紀後半代の時期のものが出土しており、漆容器の須恵器の壺もある。SD190Bからは10世紀代の土器が出土しており、下ッ道SF200の存続期間の下限を推定できる。

木簡は4点出土したが墨痕を残すだけで釈読できない。木器には曲物側板・底板、匙、斎串、工具の柄などがある。

銭貨は萬年通宝1枚・神功開宝1枚がSD190Bから出土した。



第22図 下ッ道東側溝変遷図

まとめ 今回の調査の最大の成果は藤原京域で初めて下ツ道を検出することができたことと、改修をへて10世紀まで下ツ道が存在したことを明らかにしたこととの2点である。特に7世紀代の下ツ道東側溝は溜りS X 195を中心として何回かの改修が行われていることが注目できる。掘削当初の状況は不明であるが、

1. 溜りS X 195の東側に池状の施設S X 180が設けられる。
2. 溜りS X 195と池状施設S X 180が溝S D 185で結ばれる。
3. 池状施設S X 180が廃されて、溜りS X 195だけとなる。

という変遷をたどる。

下ツ道はこれまでに平城京内・平城京外で8箇所確認されている。これに今回の成果を加えると、表のとおり下ツ道が藤原京域までほぼ一直線に設定されたことが判明し、測量技術の水準の高さをあらためて知ることができる。

	X	Y
4. 平城宮朱雀門下層	-145,903.72	-18,575.82
7. 平城京六条一坊	-147,830.70	-18,566.16
8. 稗田遺跡	-151,660.00	-18,547.00
9. 藤原宮第58-5次調査 (藤原京右京七条)	-167,321.00	-18,459.85

第2表 下ツ道東側溝座標値

	NでW	距離
4 - 7	0° 17' 14"	1,927.004m
4 - 8	0° 17' 13"	5,756.352m
4 - 9	0° 18' 37"	21,417.594m
7 - 8	0° 17' 12"	3,829.348m
7 - 9	0° 18' 45"	19,490.590m
8 - 9	0° 19' 08"	15,661.242m

第3表 方眼方位との偏角

## 5. その他の調査概要

### a 左京九条一坊の調査（第58—6次）

（1988年7月）

この調査は橿原市田中町において、住宅新築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は藤原京左京九条一坊東北坪にあたり、飛鳥川の東岸に位置する。東西2m・南北16mの調査区を調査した。飛鳥川の流水による堆積層を確認したにとどまり、藤原京に関連する遺構は一切検出されなかった。

### b 右京三条三坊の調査（第54—20次）

（1988年1月）

この調査は橿原市醍醐町において、店舗新築に伴う事前調査として行ったもので、当該地は西二坊大路に位置する。調査区の東端で自然流路の西肩の一部を検出し、出土遺物からこの流路が中世まで生きていたことを確認した。

### c 右京七条二坊の調査（第54—21次）

（1988年1月）

この調査は橿原市飛驒町において、宅地造成に伴う事前調査として行ったものである。暗褐色土の上面で中世の小規模な掘立柱建物1棟、塀1条、井戸1基および弥生時代の斜行溝3条と土坑2基を検出したが、藤原京期の遺構はみつからなかった。

### d 右京九条二坊の調査（第58—10次）

（1988年8月）

この調査は橿原市城殿町において、宅地造成に伴う事前調査として行ったものである。調査は東西3m・南北20mの調査区を設けて実施したが、飛鳥川の氾濫によって著しく削平されており、予想された八条大路と西一坊大路の交差点は検出できなかった。